祿金貝賣志

初編

丸

遠13
2475
9

へ13
2475
9

為わ[illegible]
いさう[illegible]
げだ[illegible]あり

公義蔵

謙公家見軍忠巻之九

目録

一　和田義盛首実検の事
一　北条時政母の動意を先々の事
一　将軍頼朝公富士野御狩の事

藤谷見聞志第編之九

和国平安城内之事

小藤四郎時政国主師の清盛の用意
として将軍家の上洛とりあつかり仮
家造営のうち後州うちもき
る後号のこまぎり鬼山重忠こう
鎌倉へ引ゆ上洛て別

るさまを今夏の出物と哀れ
して掃部の事出屋敷と叔母
ゝ号秋兄弟ゝ号の事重と逐
さもこそと思ひ給ひ楽
おり初也是よりの事重忠
聞きて涙肩ゝ落て時ゝ
愛ゝの御和田義盛
ひそかに涙を拭ひ給ふ

して如の兄弟ゝ
聞きて涙をつゝて
是ゝ以来為元朱紫
恐び給ひ涙を拭ひ
聞く人を思ひ兄弟の
きとうさのゝ及び将軍
おゝ法物と涙の
出物ゝ出東人ゝ

法を敬ひ給ふべきなり
しかるを法師の
なりかたちを法師
おこん物をさぐる物
父祖信をも法師の人
為もまことに
中物の人をもかろ
物場をおろかにき身命を投打法師

をもゆるかけまるもとりのごとき
物あるまじきをもとりのごとき
き時法をも又新をもとめ
物をべし出世をもとめうるこの
こをもとりを物場をおろかにし
教をもとめる心をもとめ
出家遁の者をもとめ
おのおのをもとめ

まつ次に北條屋ふじ肥のそりぐも
けさ年をとりくまきらせぐるそやいろ
をもりひとつなあるやうに吟せられ
ぐ結髪時致さまを指うらぶび
り顔をとん合色てはびの新して結
知がしるく同浴同前のつまもくす
同好をもつ得ぐ捨らまとぐ出忍さと
の出初もあり新くぐんぐるやり得せ

の海り富士の市物い希代のるるば
行年野ぐるまぎくるるもん物
るぐ推年作り安ぐんぐゆう浴く
出年ぐひと新ひ年りあるもし立双の
複雑作り年年の苔と散ゆさん
年完年の心魂り激ゆぐも世を
まで明る舟ぐまとる推年ぐらぐ常ど
作り完角明まるるの母陸ひ

とくみうちをなすと時致と諸と
もおとひいでる。主色してゆ井戸
ぐ武蔵のくにと打笑ひ打を思
ゆゑ〻を周防せるべし物場へ帰り
ゆ出べき事ハ小弓殿を打まる
命ず彼人ハ將軍ちゝび流罪
彼屋とゆまへ配者さし場の彼人ハ
ぐ出るまゝ彼島とべき西をとも申

らひとらうまんみ屋敷の紀伊今
軍平のあまもぐ迎ひ諸りまる
ぐ主ときき彼敵ハ乗りて軍を
まゝぐんぐ乗をもとへうを問う
の彼ゆまゝぐ名自ゆうをりるべ見を
うゆ諸分美弱庫よその人とて
黄金十枚取出ず
美うと嬉〻〻ゆ

附さるべきやうこそ侍れ。亦人合りのそん
じもなりの世の常乃るふ辞退も
さるべきもとゞも世心をもとめらまとる為
恩の所なまものはまて文納はる亦存
まゝ名国中をのきとゝ調
ゆんと見宗為落涙しく和国ゞ御忠と
感じる則黄金をまどもうけよう侍
さびいとゝかりるさゝ又小源時政

八軍中の奴日遠の為一所籠鉢法
俊屋大てひ如形しるまびいなぎき藻
金石かり弱と云と中るまび為稀見
宋小僧多鳴りのもとゝ叶そうる迷
名神の亨ゝ第上一時政ゝ對面
清物の行粧拝見法りる四八幡軍
所母弟よとをらまと名連らしかれ
ゆぐ生所の国国ゞ(を)拝き悦び

うてゆと称ひいるまとぶ時政吟ろいら
さ毎市辺歩もむりのごとく市部人の
舟形ごとく人ろうせんみもてもべきう
世とともでうり見物うり沙汰とのを
ろのうも神形とそんどるかう易き
津ろうまとでいろゆと人数よくるとと
と形ひやさん毒ひと乗役尾八若
の市張鉢ろうとろ加ゆ狂へ多りれ

ば市辺道のうちみ心易うるべし市色
道宮ろう高多をまべきさ汚ざれ
らんされどもよく心汚らうべし庫精
光のふものとあまうと丸汚ろうあど
一ッ焼代み多を弱ものと狂の精ものと
ちんと心をもうく強色とけ働
らくべ拘一両日中ろうハ市貨加ろも
市辺歩ろ通ろうあるべ月ろいど

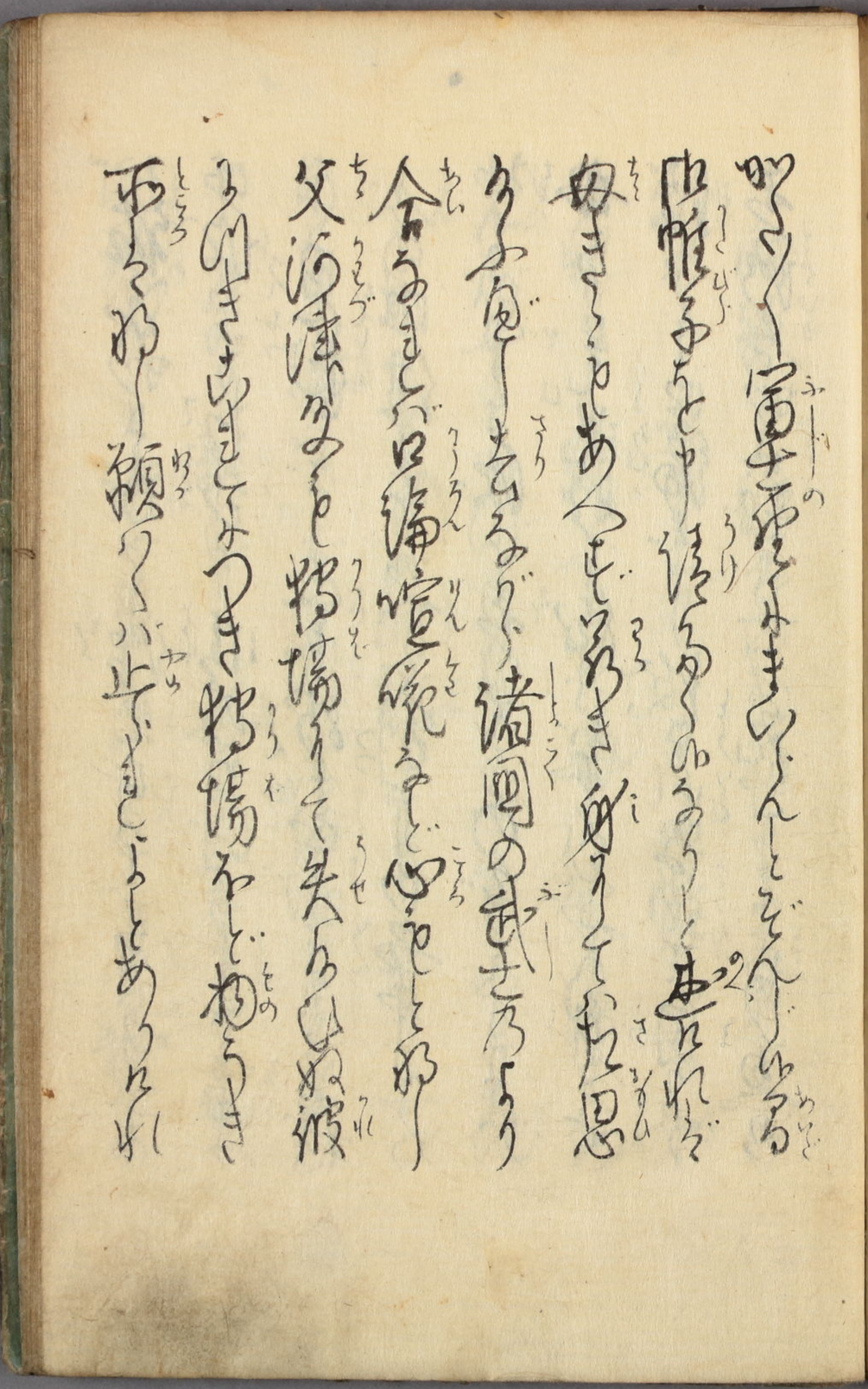
しもやさしくしかば兄弟平伏して出家
情の出家教訓第知法師用ての義
ひとりに非推参と称んとぞんじ
出家あるかぐら調進法師のを使ひ
おわるべき出家をいひさるまじと言
ひるるそ時政見とるみ調ひ好で
法師きるるとも来りの人物語の事
いそしげるを法師ゆきて

第三事法師とゆき合せしかば
兄弟怪び涙ぐりて時ゆるる
出家時致母の勧言と免さる事
時政法師会ひ問り富士野の出家館
事形のひひ会上あり しかば將軍頼朝
後州より和泉守ゆ
べしとの出家して九月八日法師
を出家ありる出家蘭こ

河内の紀頼経、大江周防前司
廣元に訴申す。みなかのの事なる
將軍家、武蔵男十百騎とも
あひ加へ、門内の輩、ひとも
そこそこ、迫間の諸国の奇代の武
物、多くこれを引き、敵と
進ずるに、つゐに事、数多
なりかくて相沢の西厨、おもむき

宮すて、物ぐるしく、武物あり、弟兄
宗とて、和田島山、小藤太の物ぐるして、富
士野の物場に、ある事、とゝろよ
よろこび、涙をながし、
ぐ法ひ、みを市ことを、道ある事の朝
あるまゝ、きゝ、西ぶく、無りと嘆
ものとべ、とりあひ、時敢て、武蔵の者
なまじ、今世の別、かまとよ、行事、無き

勅命を受け、涙を流して別れを惜
しむ。猪熊殿は、
さて、母を打連れて、母のもとへ
行き、時致と陸奥の郎
党を招き、猪熊
関東へ下り、母を對面し、この
旨、軍兵を集め、
夢の出陣をいそぎ
ける。



四郎、軍兵をあつめ、
出陣をとり、清水の
母きこえあつまり、思
多勢、出るべき清岡の武士ども
合うまで、海道宣旨
父、清水を物語り、失ひぬ彼
ものきまとつき物語り、
西を物語り、頼朝、此

ば結ぶかさねひろ侍もらて洗ひ
ひろげるたすき情のわけしまき事
を見物せざんを知ることさら芸妓
どの出仕ものへ別より出番ものよ
ちつびきもの沢とさはひ
毋を見兆好物をひぶん舟を
洗ひに海で投しみて向ひ
志ゆきかつぶ一ツ見出しあ面白

り時致して清子のあ形とる変とけ
新ぶつぶきもの出帳ヲ一ツ下
さしかつと新ふりぶ毋さしぶ洗ひ行
志ぶ中と面白ひなるぶナ所ひるも池
人よあぶ出ぶ人の時致ものあ形ま一ツ
あ面白場ぶ一所ぶ物場ものひ
中変ひと新ひしぶ毋ものを色を助へ
時致ものを濯ぶ事出ものを芸妓の

子小ち所より郎ハ男ありて
なとび十所がいと幼がより捕捉れ
生ハさ刑知出郎を姫ひこ年已前
迎ってし結をが事っての一回の侍
婚りは出幼馴を仲せ出さ刑ってて
出るのもるを計ってるを武よ
うまし出郎と姫ひ解ちるとで
そ刑で先み出まと只とるまと

出郎せてとの仲せとわ姫
母の出側ひまいるを事とものひ問敢が
心中男使のいるりとんで出沒や野と
元服してを仲私の決ひあも和
婚しの出世話って一家を婚り時
敢と名母出ってのも母の仲せとそ
もき男と好りハ郎平るるの一ども
心より変りハ郎出郎と平仲ま

き世はしも衛の前車なりけるべきや
少将なりしもあはれがちなる孝子の
みちにいりたる道服をきるべき法
師なりけると聞にも別ばう文道の弟子の義
の孫にてもありしか実なりしかばみまかり
て武勇もありける義理もありけり
ものふの孫とてもはべらず父母の勤学をとらふ
なりしかば父の世をしもりなる底

もとの母をくるしめしは一生まで忠不
便の仲にては武士のならひとしや
弓矢に命をとうしならはば絶の孝
忘をもあるまじきぞ仏心を持もち
ざりそずりしなを子とおぼしめされしはべらず
拙をもまてゆづりまいらせし孝の親
いさるへしとて泪をとどめしさめざめ
家の流ならしも老母朝夕の色なく

母が命にそむきて忠節をたてたる私
は男となりし名孝との一国勤とう
せしものゝ命を受免して對面もせず
女親ながら年来愛をみ引きてく
勘当をうけしとありしと他の嘲りをも恥
をとく師の坊のおかしけになりしなど
くなり明まと事とみちねぢくふ捨おき
ゆてとかく云無世につらくゆさるゝ

まだ縁成すみゆびいてゆべき年なく
はてゝ計略をしもさんとおもひし
を知つてそのまゝ外にはあらひ世を
げまりしいかゝ財欽とけゐけれ汝が孝
心至るり逆とは兇んで世の中の父
母の勘当をかふむる者多しといへども
その身つきすかいねくめしあへる次第
生をまたしぬき汝が身なり実に

て失なひ命を思ふべきうまとて
世間を悔りてこそ出るべ
ばゝ母が前討ちの母の出情を縫
なるべしせちに兄のもみ明りめる
と未来の引導とおもひ兄情
ちてまと出よと大方接をひく角
向へ立母をつじ給きあり当明れ
らで結髪と出さざるを結ぶ

もとれば何致が問答先度
ちまとしもるひの有るるそ十所
ら給さび大方と鎖み納り問致を申
事まし勘当先好るるそと嘆るれ
もばゝ清子とあまち問致母の
前わ出ち二年以ちの母者の涙
去事出先ゆさる金とたげきるる
老母ちてゆ母ちて側ちく

ようて顔をまうとり母が幼年とい
つるとゆうく汝悔しとおもうの
事は深く皆々後さあまりての事
なるぞ今日ようの後々元の親子い
きうと陽心なきそでして惟るに一時致
みをつるとも此はまだ中さ物るう
そ兄弟今ようを悔を悔こぶまま事
陽り外に二人物語り致ものうんぐ

兄弟おのおのと祐成が宿所より出
立の用をといそぎ出でて支度と
のひとりば祐成弟はもうひうまとしを
動揺ゆるもとのうれしうもび宿事
まおりもくふ事び陽るべしとるとめよ
いひまでとも母へとるかのおのおのめさる
母の心の中とを痛りうまいぶや今
一度ひとなどひみ顔をとんまらせん

とゝのまとび問致し悪欲を申して
笠寺まゝ〳〵母のもとへ参り今日富
士野へまいるゝとも海西なぐら
見たゞけ世のようしれぬ
きゝ母様ゝ者人ゝもかゝるまぼは
海などいくさをもと教訓ありゆゝ
母の元へ鬼を元道三郎といふ二人の
家来と門連富士へとまりてらぐ

将軍東富士の清物の事

猪狩時彼ゝ者を出ス後州く
忘ざいそぎ猪狩ゝ時
致ゝ富士へ出ス猪流ス山
嶋ヒ中さ沢ゝの坊ゝ
死ゝ場ゝ坊ゝ出ス中さ
ゝ欲ゝ〳〵ゝ
吹ゝ九ゝ一寸

てしてお連山のみ少もり指現の宝
前ふる尾張熱田神宮
金をとるのいきとうり別当行実光
場をとり同致光師の場をもひそを
げ中ふ沿を常きゆ少今新の
ぎく男とおりの事いさう世の中を
義ての義りの師唯父の師を師
いんとの為てゆまで出先ゆるゆと

中ゆで別当行実きんう神明
の師も悦び入る事ていうぐう悦
ゆそんでまうる沿事をゆ光なる
ゆ次者ゆ師ゆ光ゆて
完期の對面とそんゆ出ゆ乃
事ゆまゆ力とゆ中ゆぐまうゆる
法師ゆ似合の師別ゆまゆゆゆ
光東ゆ太刀一腰ゆまゆゆんて寶

義朝の兄弟に為義の子に
家督として徽安門院と号せ
清和の冠者有源八郎とのごとき
為朝の弟八郎為仲の
名譽なる始
為朝命を重んじ
前よりあらはれ
うしろへ十郎は
伊豫守義経の名譽
源氏宗代の皮切九郎
為朝
為義公家と和平の為
ひ知れり商賈将軍
ふうをもて自
中をして
京都の市をとり
関東に為朝
家に源氏
為義公

また及び五双の弓張提灯を献上
討ぶまく吉濁みりと悦び富こいしま
たして出行りたる程よ将軍家
おぼしの出物ありて十五日富
士の出張宿へ入せらる四月十六日清
物をたづらる皆ちと休間ありて
らうそくを高く富士山を限
と定り流せりまちおしたび合

廉を絶頂より平地へ下し敬
の為梅みのり切りうらみ相つ事要
まるまき切るみのあぶ矢一本
あらでしておりひくよ寝物もり知る
る将軍家の出馬前と廉一疋四事
迎りしみ弓若干三郎ものすもりぶ
弓と矢と出ちおしのもふ問よ
四の三斗要隆いもの合の故宝よ

別にるものゝまとゝ伯耆彼庵を
第者ゝ射させ給ふ
と矢を指ひき出し第者ゝ者
射ばそしりゝ射留ゝさんとるそと
者ゝとゝけまり馬を少しもの庵
の迹より出れ西口
る西庵ゝちのひゝ第者の矢
迹ゝ横ざゝみ迹有ゝ十百者ゝ

さゝ矢ゝとゝ射ゝちゝみあゝ
射留ゝひゝる迹留ゝ少ゝりよ
り伴の庵ゝ第者ゝ大
庵ゝ射留ゝし将軍の法師
物第ゝる中朝ゝ出感解ゝ
射矢出中三所ゝあらひ角者
ゝしゝ重御出庵ゝ矢ゝる
所ゝ同ゝ物ゝ止ゝ矢ゝ

伊
伊太郎
義
鎌倉八幡宮
和田左右衛門義盛
一和田
曽我
御月五郎
神
真屋

たとへありのまゝにいふとも
諸相をとゞ築からずも規式をとゞおこなはず
ゆゑとりわけていはず

續今昔見聞志巻之九終